
girl or girl

DAIDO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

girl or girl

【Nコード】

N0139Z

【作者名】

DAIDO

【あらすじ】

そら
空

えんまきゆき

円巻優姫

たきさわなやか

滝沢菜夜日

三人が描く三角関係ラブストーリー。

命日の朝（前書き）

初投稿なのでほかの方の作品とぶっている、にている、へたくそな
どがあつたりするかもしれないませんがその時はおっしゃっていただ
けるとありがたいです。

あと、滝沢が滝澤になったりするかもなのでそういう誤字脱字は、
バンバン言ってもらえるとそれもありがたいです。
では、宜しく願います！！。

命日の朝

「起きろ——！！遅刻するでしょ！？」

大きな声とともに起こされた俺は時計を見た。

まだ登校時間までは時間がある…のだが。

「あのねえ…。いい加減自分で起きてくんないかなあ…。」

と言いつつも、毎朝俺の事を気にかけて（？）朝ごはんなんかを作ってくれているツンデレさんだ。

ちなみにこいつの名前は、滝沢菜夜日^{たきざわなやか}だ。

俺と菜夜日の関係はと言うと、小さいころからの幼馴染みで俺たちは今日から高校三年になり、大学のことも考えだしていた。

ともかく、俺は菜夜日に反撃と言わんばかりに言い返す。

「朝眠たいのは若い証拠証拠——。」

と、おでこに軽いデコピンをかます。

「痛っ！やったなあ…。」

と、菜夜日も俺に反撃。

が…。

「ちよつと、空…。」

「ん？」

空^{そら}とは俺のニックネームだ。

「今日…。何の日か覚えてる？。」

今日か…。もちろん忘れるはずがない。

「一年前の今日だよな。」

「ごつごめん。なんか辛いこと思い出させちゃった…？。」

俺は最初から気が付いてはいたのだが、この話題は暗くなるかなと思えばえて菜夜日には話さなかった。

だけど、これで暗くなったらきつとあいつも喜ばないだろう

だから、

「大丈夫だよッ！。それより飯食おうぜ。とりま俺は服着替えるから先に下に行つといてくれ。」

あえて明るく振る舞い、着替えをしだすと、

「ちよつ。わたしがでてってからにしないでよ変態!!」
と言ってあわてて出て行ってしまった。

けど、

なんだかんだ言いつつも…

やっぱり俺が好きだった優姫のいる方向に向かって手を合わせる俺がいた。

一年前の出来事？

一年前。

「原因不明です。優姫^{ゆき}さん自身の回復に任せるしか方法は有りません。」

俺は医者に絶望的な事実を告げられた。

高1の3月。

優姫、すなわち俺の恋人であり幼馴染みの優姫が、原因不明の病にかかり、倒れてしまい日を重ねることに病状が悪化していくのがわかった。

始めは軽い会話などで笑い合えるくらいだったが今では、俺が手を握ると握り返すのがやっと、といった状態だった。

しかも、どん底だった俺をさらに地獄に叩き落とした事実。

それは医者の放った一言だった。

「余命。」

「へ？」

「この病状を見る限りもって余命1ヶ月といったところです。」

医者は絶対患者の事については泣かないそうだ。

その冷淡な瞳から躊躇なく訴えかけられる。

は？

俺は、状況が飲み込めなかった。というか、納得が行かなかった。

本人は原因不明のまま死んでいき、回りはそれを「はいそうですか。」と

受け入れなければならない現実に納得がいかないのだ。

俺はその場に倒れ込んだ。

怒り・悲しみ・希望、何かわからないごちゃごちゃな感情がココロの中を渦巻き、

多分ひきつった、そうだな…はたからみればニヤケ顔のようになっていたのだろう。

それから数日やはり、優姫の容態はよくならぬままだった。

そればかりか日に日に悪くなっている。

辛そうにすこし唸り声をあげればまた静かになる。

その繰り返しで、もちろん、優姫と俺が変われるものなら変わってやりたかった。

このとき俺は、昔こんなエピソードがあつたな。と、記憶が脳の奥底から、よみがえってきた。

それは俺がまだ、小4くらいの頃だっただろうか？。

・・・元々、優姫と俺と菜夜日は幼馴染みで3人で遊んでいたのだ。もちろん。まだ俺と優姫は付き合っていないころだった。

というか、かなり無邪気であってそんな異性というのを全然意識していなかったのだ。

ところがある日ままごとに付き合わされていた俺は、こんなできごとに関き込まれた。

まず菜夜日のこの一言から始まった。

「私がお母さんと優姫が娘役やってー。空はもちろんお父さんね？」

そして菜夜日が再び、

「とにかく、始めるよっ」

と言い、しゃあない。付き合うかと思っていたら、以外にも菜夜日より精神的に大人な優姫が反論したのだった。

「なんで、かってに決めちゃうのよ。私、私だって、空のお嫁さんがいいよー!!。」

すると、菜夜日だってこれに反論して、

「私のほうが絶対、空のお嫁さんにあってるっ。」

こちらにも負けちゃいない。正直、二人ともかわいいし文句のつけどころがなく、ここだけの話よくもてる。

それにままごとだし・・・どっちでも良かったんだけどー。声を重ねて

「「空はどっちがいいの」」

「じゃあ、友姫が本妻で菜夜日が愛人ならー？」

おれは温厚な方法で突破したつもりだったが、これまた声を重ねて、

「「このっ浮気者が」」

「馬に蹴られて死ねば？いや、浮気者死ね。」

と菜夜日いやいや、2回とも結局死んじゃいます。

「馬なんて生ぬるいよ、なーちゃん。やっぱり残酷に殺らないとー
ーハハ。」

ざーんくく空の運命」

…まてまてあの名曲をそんな替え歌にしちゃ真剣^{マジ}で駄目だ。

俺はこれ以来、2人を怒らせないように心掛けた。

そして、あれから何年かたった、高1の秋。

俺は、優姫と同じクラスになった。

実はこの時あたりから、優姫に対する異性として

「好き」という気持ちが強くなっていた。

もちろん、この時も優姫はルックスが良く性格も優しいからとてもモテた。

ところが優姫はこの告白を受けずに断り続けていた。

しかも断り方は、いつもきまって、

「気持ちには嬉しいんだけど私には、好きな人がいるから。」
と言うものだった。

だから俺はある日それが気になったので帰り道に聞いてみたのである。

「なあ。優姫？」

いつも通りにさりげなくだ。

「どうしたの？」

「いやさ…、お前、いつもコクられてんのになんで断るのかなあと。」

とても気になる。

「なぜか？」

「うん。」

「好きな人が…いるからかな？」

ドキツとした。

そのときの優姫の表情が大人な表情でかつ、とても色っぽく見えたからだ。

確かに、それ以上の追求はどうかと思ったけど、聞かないと心に引っ掛かったままだから追求することにした。

「答えたくねえならいいけどよ…好きな奴って誰なんだ？」

思いきって直球勝負だった。

対する優姫はにこやか…じゃねえなニヤニヤと、

「知りたい？」

と顔を覗き込んできた。

「まあ…な。」

俺は渋々頷く。

正直に「聞きたい。」というのは

なんというかねえ？男のプライドが許さん。

すると、優姫は思いがけないことを口にするのだった。

「今・・・私の横にいるよ?。」

「え?」

優姫のいつてる言葉の意味がわからなかった。

横につて、横には俺だけしかない。

もう一度は優姫は自分に言い聞かせるようにうなずいて、くるりと体を反転させ、夕日をバックにはっきりと言った。

「私は、空のことが、世界で一番つつつつ。」

「大好きです。」

突然の告白だった。

ただ、優姫がはつきりと言ってくれたのは、俺の事が好きという気持ちだった。

もちろん、自分も好きだということを伝えたかったのだが、あまりの驚きと喜びとで声がでなかったのだ。

しかし、体は早くに動いた。

夕日に照らされている優姫を自然に

抱き締めていた。

「これが俺の返事だ...。」

「そ…ら？」

優姫は不思議そうに俺の名を呼んだ。

俺は、優姫の髪を優しく撫でた。「ん…。」

撫でられるのがくすぐったいのか声をかすかに出す。
だがそれは唐突にも。

「んぐつ。」

なんだ？このふわふわした
唇にあたってるものは。

目線をしたに戻せば、
真っ赤な顔になりながらも
背伸びして俺の……始めてのキスを優姫にあげた、
いや、もらったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0139z/>

girl or girl

2011年12月2日18時49分発行